

ふるさと 資料紹介

= ③4 =

古文書にみる
近世庶民のくらし②

太田の渡し場づくり

安藤広重の「太田の渡し」は、旅人が憩うのんびりした風景が描かれています。水辺までの河原や船着き場は描かれていません。

宿場から川べりの道まで、そしてそこから水辺までは、時代によつて差はありますが、そこそこの距離がありました。また、浅いところから急流になっていて、自然のままでは船には乗れませんでした。

そこで、旅人が歩きやすくなり、船を接岸しやすくなるための「渡し場づくり」が地域の人々に命じられていました。記録によると、幕府の役人などが通るたび、渡し場づくりが命じられました。そのうえ、年に何度となく大水によつて流され、そのたびごと、地域の人々は動員されました。

また、山の雪が解け始めると、中山道の通行はひんぱんとなります。その雪解け水に漬かつての手作業による波止場づくりが行われました。

左の文書は、天明六年（一七八六）の波止場づくりに関するものです。船小屋から波止場まで「百九拾弍間」（二百四十六段）の間に道を作ったことが記されています。

一 百九拾弍間

船小屋
中宿宿場と波止場

十間

日光寺門前縁下り向
日光寺宿場

大木寺より舟おこし
日光寺宿場